HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 三条西家本『和泉式部日記』不審本文考：「紅葉狩り」場面の衍字と脱文をめぐって |
| Author(s) | 後藤, 康文 |
| Citation | 国語国文研究, 159, 1-9 |
| Issue Date | 2022-08-22 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/90704 |
| Type | article |
| File Information | Kokugokokubunkenkyu_159_01-09.pdf |

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 三条西家本『和泉式部日記』不審本文考

## ――「紅葉狩り」場面の衍字と脱文をめぐって――

後藤康文

### 一　はじめに

女の心が南院入りへと傾きつつあった十月、宮は、美しく色づいているであろう山の紅葉をさあ一緒にと、女を誘う。その物見話はしかし、にわかな物忌のせいで実現せずじまいになるのであったが、この、いわゆる「紅葉狩り」場面を綴った三条西家本『和泉式部日記』の本文には、読解上今日なお詳らかでない箇所が少なくとも二つほどある。

すなわち本稿は、それらをともに不審本文に起因する不明と判断し、一つは「衍字」、一つは「脱文」の観点から、それぞれに大胆な〝復元〟案を提示するものである。

### 二　「紅葉狩り」場面の衍字

はじめに、「紅葉狩り」場面の衍字について述べる。それは話の発端部分に認められ、傍線部本文が問題となる。

このころの山のもみちはいかにをかしからんいさ給へみんとの給へはいとよく侍なりときこえてその日になりてけふは物いみときこえてと、まりたれはあなくちおしこれすくしてはかならすとあるにその夜の時雨つねよりも。木、の木の葉のこりありけもなくきこゆるにめをさまして風のまへなるなとひとりこちてみなちりぬらんかし昨日みてとくちをしうおもひあかして

（三八ウ六行～三九オ三行／七六頁～七七頁）[1]

三条西家本を底本とする主要諸注[2]の、この箇所＝「『今日は物忌』と聞えてとまりたれば」に対応する訳文は、

・物忌ときこえて〕ものいみだといふので　（『新註』註釈）

・「今日は物忌みですので……。」と申し上げて家にとどまった。
（『全対訳』現代語訳）
・「今日は物忌で、御いっしょに参れません。」と申しあげて家にとどまった。
（『全講』通釈）
・「今日は物忌……。」と申し上げて、とどまりましたので
（『譯注と評論』訳文）
・「今日は物忌ですので」と申し上げて家にとどまっていると
（『新全集』現代語訳）
・女が「今日は物忌です」と申し上げて、計画は中止になってしまった。
（『角川ソフィア文庫』現代語訳）
・宮様の方から「今日は物忌になった」というお知らせで中止になったので
（『注釈』現代語訳）

となっており（傍線筆者、以下同）、大半が「聞ゆ」を「いふ」の謙譲語で「申し上げる」の意に解している。動詞「聞ゆ」自体の解釈としては至極妥当な判断といえるのだけれども、それでは文脈が乱れてしまい問題が生じることになる。直後の宮の発話において、「これ」という近称の指示代名詞が使用されている点からしても、[3] 紅葉狩りが急遽中止となった原因が、女の物忌ではなく宮のそれであったことは動かないのに、その事情を女の側から「申し上げ」たことになって矛盾が生じてしまうのである。

そこで提唱されたのが、『注釈』の異説であり、その「補説」欄において、

従来の諸注釈では、せっかくの紅葉見の約束を一旦快諾したのち、「物忌と聞えて（申上げて）」ことわったのは女とする。しかし、女側の勝手な都合による中止、とするならば、翌朝の贈答において女が高姿勢、宮が受太刀である事が全く理解できない。一方、寛元本では「今日は物忌とてとぢこめられてあればなん……と宣はせたるに」、応永本では「今日は物忌にとぢめられてあればなん……とあるに」とあり、また正集二三一「紅葉ばは」詠の詞書にも「宮より、紅葉見になむまかるとのたまへりけれど、その日はとゞまらせ給ひて」云々と見えていて、いずれも「ことわったのは宮」なる事明らかである。しかし、九段に述べたごとく、「今日は物忌と聞えて」を「今日は物忌と了解されて」――「今日は物忌だというお話で」と解釈するなら、当本も他本・正集と同じく（しかもはるかに簡潔に）「ことわったのは宮」と言っているのだ、と首肯されよう。

と説かれている（圏点原文）。[4] 通説のごとく「聞ゆ」を「いふ」の謙譲語とみたのではどうにも埒が明かないので、別途「耳に入って。知られて」（語釈）の義で読み解く試みだが、これはこれで明らかに無理がある。「ことわったのは宮」との指摘はまったくもってそのとおりなのだけれども、作中に頻出する同形の用例に照らしてみても、[5] また、古文解釈の常識的見地からも、この「聞ゆ」は「いふ」の謙譲語以外の何ものでもなく、特別扱いは許されるべくもないからだ。

となれば、「『今日は（宮様の）物忌』と（女が）申し上げて」などという奇妙な意味にしかならない傍線部本文には、必ずや根本的な誤りがあるに違いない。そう思いつつ、三条西家本の書写様態を確認してみると、驚いたことに、

いさ給へみんとの給へはいとよく侍なりと[きこ]
[え]てその日になりてけふは物いみと[きこ]
[え]てとまりたれはあなくちおしこれ

（三八ウ七行～九行／七六頁）

となっていて、立ちどころに謎が解けたのである。要するに、右三行のもとの形は、

いさ給へみんとの給へはいとよく侍なりと[きこ]
[え]てその日になりてけふは物いみと
てとまりたれはあなくちおしこれ

だったに相違ないのである。八行目最後の文字「と」までを写し終えた書写者の目が、不覚にも前行行末から当行行頭にかけての字配りに惑わされ、その結果、正しくは「とて」と写すべきところを、もう一度「とき[こえ]て」と写してしまった。――そうした経緯が、右の有様から容易に思い浮かぶのではなかろうか。われわれは、問題箇所直前にも「ときこえて」というまったく同一の文字列が存在したことに、もう少しだけ注意を向ける必要があったといえよう。

この目移りによる衍字は、三条西家本書写時に発生したものと断じてよく、本節掲出本文は、およそ次のように整定することができよう。

「このごろの山の紅葉はいかにをかしからむ。いざ給へ、見む」とのたまへば、「いとよく侍るなり」と聞えて、その日になりて、「今日は物忌」とてとどまりたれば、「あな口惜し。これ過ぐしてはかならず」とあるに、その夜の時雨、つねよりも木々の木の葉残りありげもなく聞こゆるに、目を覚まして、「風の前なるなどひとりごちて、「みな散りぬらむかし。昨日見で」と口惜しう思ひあかして

そして、傍線部本文は、「『今日は（宮様の）物忌』ということで（紅葉狩りは）中止になったので」ほどの意となる。少しあとの「木ゝの木の葉」云々においても、おそらくは「木ゝの」と「木の」の目移りが原因で、「木ゝ」の二文字を一旦は脱した形跡があることを思うと、書写者はこの時、集中力をいささか欠く状況下にあったのかもしれない。

## 三　「紅葉狩り」場面の脱文①

つぎに、「紅葉狩り」場面の脱文について述べる。それは前節所掲箇所から少し進んだ次の本文中に認められ、傍線部a・bをどのように解釈するかが〝復元〟作業の大きな手がかりとなる。

一日おはしたりしにさはることありてきこえさせぬそと申ゝを
a おほしいてゝ
たかせ舟はやこきいてよさはることさしかへりにしあしまわけたり
ときこえたるをb おほしわすれたるにや
やまへにもくるまにのりて行へきにたかせの舟はいかゝよすへき
とあれは
もみち葉のみにくるまてもちらさはたかせの舟のなにかこかれん

とてその日もくれぬれはおはしましてこなたのふたかれはしのひてゐておはします

（三九ウ一一行～四〇ウ二行／七八頁～八〇頁）

まず問題となるのは、傍線部a「おぼし出でて」と次の歌を受ける「聞えたるを」との間に生じる敬語の不整合にある。すなわち、歌の詠主が宮であれば「おぼし出でて」→「とのたまはせたるを」、また、女ならば、「思ひ出でて」→「と聞えたるを」とあるべきところなのだ。そのため、従来の解釈も、

・おぼしいでて」思ひいでて、の誤写であらう。又思ふに此の日記は自らを三人称にして書いてあるので、ふと式部にことに敬語を用ひたのでもあらうか　（『新註』註釈）

・ある日、（宮が式部の家へ）いらっしゃった時、（式部が）差し支えがあるからお目にかかれない、と面会をことわったことがある。それを（ことわられついでに）思い出されて。三行とんで「とあれば」へつづく。　（『大系』頭注）

・そのことを思い出されて、――実はそれから後に女が　（『全対訳』現代語訳）

・その時のことを思いだされて――それからあとで女が／と（女が）申しあげたのを、（宮が）思い出されて。「一日おはしましたりしに……と申ししを」が回想の部分。「おぼしいでて」は、宮が、今、女に紅葉見物をことわられた連想で、もうひとつ、ことわられついでに思い出したのである（下略）。　（『全講』通釈／語釈）

・おぼし出でで――お思い出しなさらないので。　（『譯注と評論』注解）

・「さはることありてきこえさせぬぞ」と申ししをおぼし出でて／通説では女の詞だが、「……ぞ申しし……」の語法不審。ここでは童たちの会話を宮が耳に挿（はさ）んだものと解した。「さはること」は女の穢れをさす。　（『集成』本文／頭注）

・「さはることありて聞こえさせぬぞ」と申ししをおぼし出でで。／思い出すこともなさらないで（まったく「不覚なること」です）。紅葉見物のことばかり言っていないで、私の差し障りの件を思い出して問いかけてほしいの気持。／「差し障りがありましてお目にかかれないのです」と申しあげたのを、お思い出しにもならないとは。　（『新全集』本文／頭注／現代語訳）

・おぼし出でて／お思い出しになられて／（前略）紅葉狩りが流れてしまったことをしきりに残念がる女をなだめるうちに、しまいには「色鮮やかなのは常磐山の紅葉くらいでしょう」と揶揄されてしまった宮であったが、高瀬舟の歌を受け取ってあらためて「そういえば、もともと女の都合が悪くて取りやめになったのではないか」と思い出す、すなわち「おぼし出」でたのである。　（『角川ソフィア文庫』本文／現代語訳／補注）

などと区々で、「思ひいでて、の誤写」を疑ったり（『新註』）、歌との間に時間の経過を想定したり（『全対訳』『全講』）、「て」を打ち消しの接続助詞「で」に解したり（『譯注と評論』『新全集』）と、さまざまな〝辻褄合わせ〟が試みられてきた所以である。

さて、諸注の苦闘を後目に、このジレンマを解消するには、今ある「たかせ舟」＝「高瀬舟」歌の前に宮が詠んだもう一首の「高瀬

舟」歌があったと想定し[6]、「おぼし出でて」を「とのたまはせたれば」に連絡させるのがもっとも自然ではないだろうか。失われた宮の贈歌をとりあえず〔歌x〕とすると、この部分の〝復元〟本文は次のようになる。

と申ししをおぼし出でて、

〔歌x〕

とのたまはせたれば、

高瀬舟はや漕ぎ出でよさはることさしかへりにし葦間わけたり

と聞えたるを、おぼし忘れたるにや

二組目の贈答でともに第四句に「たかせの舟」＝「高瀬の舟」が詠まれているように、脱落した宮の歌は、女の答歌同様初句「高瀬舟」で始まっていたものと推定される。「おほしいて、」までを写してきた書写者の筆が、宮の贈歌を越えて初句を同じくする女の答歌へと一気に飛んでしまったわけである。なお、この脱文は三条西家本のみならず他系統本文にも同様に認められるため、現存諸本の共通祖本段階で生じたものと考えられる[7]。

## 四　「紅葉狩り」場面の脱文②

さて、傍線部bに関しては、宮がいったい何を忘却したかのように見えたのかをめぐって、

・おぼし忘れたるにや〕宮が、いつぞやの事を忘れて、この歌もやはり紅葉について詠んでよこしたものと思はれたのか

（『新註』註釈）

・「おぼし忘れたるにや／お忘れになったんでしょうか。（はやく逢いに来いと、あなたはおっしゃったんですよ。）

（『大系』本文／頭注）

・と聞こえたるをおぼし忘れたるにや／逢う瀬お断りの支障がなくなってから、女が宮に贈った歌と見る。この歌から「おぼし忘れたるにや」までは挿入句。宮は、女からの断りだけを覚えていて、すぐに支障なくなったから会いに来てくれという彼女の弁明の歌を忘れているというのである。／と申し上げたことをお忘れになったのだろうか――

（『全対訳』本文／脚注／現代語訳）

・お忘れになっているのだろうか、――／と（女が）詠んでさしあげたのを、（宮は）お忘れになっているのだろうか。つまり、宮は、女が逢瀬を拒んだことだけをおぼえていて、障害解消、おいでを請うと訂正弁明した女の歌の方は忘れていたのだろうか、というのである。文脈としてみれば、挿入句（はさみこみ）扱い、宮の「山べにも」の歌の事情をよりくわしく解説するためのものである。

（『全講』通釈／語釈）

・おぼし忘れたるにや／宮は人麿の歌のことをお忘れになったのか、の意。五行目「おぼし出でて」を受ける。

（『集成』本文／頭注）

・おぼし忘れたるにや／差し障りの件は本当にお忘れになったのか。／宮は本当にお忘れになったのか

（『新全集』本文／頭注／現代語訳）

・「おぼし忘れたるにや／紅葉見物のことは、もうお忘れですか。／おやおや、お忘れになられたのですか。

（『角川ソフィア文庫』本文／脚注／現代語訳）

というように、これまた従来さまざまに説かれてきており、まるで収拾不可能な状態だったわけだが、本稿の本文〝復元〟案を踏まえるならば、作者は、宮が過日の〝拒絶〟を思い出して先刻詠んだ歌において、自らを「高瀬舟」に喩えたことをもう「お忘れになったのだろうか」と、そう揶揄したものと解せよう。「高瀬舟」を宮の比喩に用いたのが、あたかも女側の着想であったかのような「やまへにも」＝「山辺にも」歌の詠みぶりだったからである。

そこで、その「山辺にも」歌の解釈である。参考までに列挙すれば、諸注の見解は以下のとおり。

・山辺にも車に乗っていくのが当然であるのに（紅葉見物は当然すべきですよ）。（下略）

（『大系』頭注）

・あなたが不覚だといって笑われたその山辺にも車に乗って行けば行けるのだが、一方、この間の『障ることあり』と拒（こば）まれた高瀬舟のほうはどうして棹さして近寄ればよいのだろう。

（『全対訳』現代語訳）

・あなたが不覚だと笑われた、その山辺にだって、すくなくとも『いざかしゆきて……見ん』とあるのだから、強引に車に乗って行けば行けるのだが、一方、この間の、『障ることあり』とお止めになった高瀬の舟は、どうして棹さし近寄ることがきまし（ママ）ょう。とても寄ることができないではありませんか。／（上略）初句「山べにも」は、応永本・類従本「山べには」。「は」の方がわかりよいが、「も」の方は、なお女の前歌（「うつろはぬ」の歌）を承ける「も」と考えておく。

（『全講』通釈／語釈）

・〈紅葉見に山へ行くとすれば車で行くはずなのに、どうして高瀬舟など使うのか、よく判りませんね〉

（『集成』頭注）

・山の紅葉を見にゆくのにも車に乗ってゆくはずなのに、高瀬舟などとおっしゃっても、どうやって出かけられるのでしょうか。

（『新全集』現代語訳）

・あなたが行きたがっていたのは山辺の紅葉見物のはず。山辺へ行くにしても、それなら車でいくべきでしょう。ですのに今度は高瀬舟ですか。高瀬舟など、紅葉見物に行くのにどう寄せたらよいものか。すぐにあなたの所へは行けませんね。

（『角川ソフィア文庫』現代語訳）

・行きにくい山だって車に乗れば行けるけれど、あなたのようにおっかない人の所には、高瀬舟なんてとても寄せられないよ

（『注釈』現代語訳）

初句「山辺にも」は、係助詞「も」[8]を添加の意とみて、「（あなたのお屋敷へ伺う折はもちろん、）山辺へ（出かけて）行く時も（また）」と解くか、類推の意とみて「（たとえ）山辺であっても」の意に解くか（『全講』『注釈』）のいずれかしかなかろうが、前者が正解。すなわち、上三句は「（あなたのお屋敷に伺う場合はもちろん、紅葉狩りに）山辺へ出かける場合も（当然）牛車に乗るべきであるのに」の意で、宮は自らを「高瀬舟」に喩えたのが女であるかのように反駁してみせるのである。残る下句は「（よりによって水路を行く）高瀬舟なんぞが、どうして（陸路をたどって）山へなど近づけましょう

か」ほどの意となろう。

最後に、失われた宮の贈歌を括弧付きで鋭意〝創作〟して補うならば、本節掲出本文はおよそ次のように整定することができよう。

一日おはしたりしに、「さはることありて聞えさせぬぞ」と申ししをおぼし出でて、

高瀬舟〔さはる葦間をわけわびて漕ぎ出でたれどさしかへりけり〕

とのたまはせたれば、

高瀬舟はや漕ぎ出でよさはることさしかへりにし葦間わけたり

と聞えたるを、おぼし忘れたるにや、

山辺にも車に乗りて行くべきに高瀬の舟はいかが寄すべき

とあれば、

もみぢ葉の見にくるまでも散らざらば高瀬の舟の何かこがれむ

とて、その日も暮れぬればおはしまして、こなたのふたがればしのびて率ておはします。

ある日おいでになった折に、「今日は支障があってお目にかかれません」とお伝えした（ことがあった）のを、宮は今思い出されて、（その時の空しいご帰邸の心境を）「高瀬舟」云々とお詠みになった。だから女は、そのお歌の措辞に合わせてお返事申し上げた（だけな）のに、（宮は、前歌で自身を「高瀬舟」に喩えられたことを、早くも）お忘れになったのだろうか、（まるで女がその喩えを持ち出したかのような詠みぶりの）「山辺にも」歌が届いた。と、話の流れは、およそのようになる。

## 五　おわりに

三条西家本『和泉式部日記』本文の不審箇所は、いまだ少なからず残されている。夢よりもはかない冒頭場面で、ひょっこりと顔を出した小舎人童に対して、

いとたよりなくつれ〳〵に思たまふらるれは御かはりにもみたてまつらん　（一ウ四行～六行／二頁）

と女が語る箇所があるが、右傍線部などはその代表例といえるだろう。通説はこれを「思ひたまうらるれ」に改訂し、「思ひたまう」は「思ひたまへ」のウ音便形と説明するのだが、これには唖然とするほかない。下二段動詞がウ音便化する道理が、この世のどこにあるというのだろうか。それは無論あり得ないわけだから、ここは「へ」→「ふ」の誤写で「思ひたまへらるれ」、または「らる」が衍字で「思ひたまふれ」のいずれかを、本来の形と考えてしかるべきところのようにみえる。ただし、こうした解決策が有効となるのは、問題がこの一箇所に限られる場合であって、のちにもう一度、

かつらきのかみもさこそはおもふらめくめちにわたすはしたなきまて

わりなくこそ思たまふらるれときこえたれは　（三七ウ八行～一一行／七四頁）

とまったく同形の表現が現れることを考慮すると、誤用の可能性も視野に入れねばならず、話は一転複雑化して一筋縄ではいかなくな

るのである。

こうした懸案を一つでも多く解決すべく、三条西家本『和泉式部日記』の本文それ自体の入念な吟味を、今後本格的に推し進めていく必要があるといえ、本稿の試みがその一石となれば幸いである。

## 注

（1）本稿における三条西家本本文の引用は、鈴木知太郎校異『和泉式部日記』（武蔵野書院、昭三一）に拠り、原本の丁数と行数および影印本の頁数を表示した。

（2）本稿で引用する『和泉式部日記』の注釈書とその略称は以下のとおりである。玉井幸助『和泉式部日記新註』（世界社、昭二五）→『新註』、遠藤嘉基担当『日本古典文学大系　土佐日記　かげろふ日記　和泉式部日記　更級日記』（岩波書店、昭三二）→『大系』、鈴木一雄『全対訳日本古典新書　和泉式部日記』（創英社、昭五一）→『全対訳』、野村精一『新潮日本古典集成　和泉式部日記　和泉式部集』（新潮社、昭五六）→『集成』、円地文子・鈴木一雄『全講和泉式部日記　改訂版』（至文堂、昭五八）→『全講』、今井卓爾『和泉式部日記　譯注と評論』（早稲田大学出版部、昭六一）→『譯注と評論』、藤岡忠美担当『新編日本古典文学全集　和泉式部日記　紫式部日記　更級日記　讃岐典侍日記』（小学館、平六）→『新全集』、近藤みゆき『角川ソフィア文庫　和泉式部日記　現代語訳付き』（KADOKAWA、平一五）→『角川ソフィア文庫』、岩佐美代子『和泉式部日記注釈［三条西家本］』（笠間書院、平二五）→『注釈』。

（3）岩佐美代子「和泉式部日記読解考」（「国語国文」昭六一・四）→『宮廷女流文学読解考　総論　中古編』（笠間書院、平一一）もこの点に留意しており、「女の側の物忌なら、宮からは「それすぐしては」というべき所ではないか」と述べいる（圏点原文）。同説は、先行する前掲注3論文においてはじめて提唱されたものである。

（4）三条西家本『和泉式部日記』中の引用の格助詞「と」／副助詞「など+動詞「聞ゆ」の用例は、当該箇所を除いて全部で三五例ほどあった。その内訳を示すと、「と+聞え（未然形）」一例、「と+聞え（連用形）」二七例、「と+聞ゆ（終止形）」三例、「と+聞ゆれ（已然形）」三例、「など+聞え（連用形）」一例となるが、これらの「聞ゆ」はすべて「いふ」の謙譲語として用いられており、例外は認められなかった。

（5）岡田貴憲『『和泉式部日記』を越えて』（勉誠出版、平二七）第七章「十月条「紅葉狩り」記事の解釈――本文改変による文脈の反転――」（初出「『和泉式部物語』紅葉狩り記事試論――本文の解釈と変成過程をめぐって――」『古代中世文学論考』第二十九集、平二六・四）も、同じく「一日」の面会謝絶後に宮から「たかせ舟」の語を詠み込んだ贈歌があり、それに対する返歌として女の「たかせ舟」歌が詠まれた、と想定することにより、宮の行動について文脈上の矛盾を回避して解釈することが可能と考え」ているが、それを三条西家

本本文の「脱文」とはみていない。同論は、本稿とは種々見地や解釈を異にするものの、難解な「紅葉狩り」場面に関する斬新な読解案を提示していて有益である。併読をお願いしたい。

（7）岡田貴憲・松本裕喜編『『和泉式部日記／和泉式部物語』本文集成』（勉誠出版、平二九）四九七～四九八頁参照。

（8）「やまへにも」は『全講』が指摘しているように、応永本系諸本や群書類従本などでは「山べ／山邊には」となっていて、この形の本文に拠れば「（川辺ならばともかく）山辺には」「高瀬の舟のいかが寄すべき」の意となる。取り立ての係助詞「は」の方がわかりよい」（『全講』）のは確かであり、「者」→「毛／裳」の誤写で「は」が本来の形かとも思うが、今は三条西家本の本文を尊重しておきたい。ちなみに、寛元本系統は「やま人は」に作る。前掲注7書五〇〇頁参照。

（ごとう　やすふみ・北海道大学大学院教授）